



〈公開〉 生と死の語り

□会場 東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□最寄駅 六本木駅(日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅(大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分)
□先着 100名様

□参加費 各回500円
本学院在校生・教職員無料
□事前申込み 不要

第5回連続講座

12月7日(土)

14:40-16:10(受付14:10~)

■プロフィール

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。ハイデルベルク大学初期キリスト教考古学・ビザンティン美術史学科修了(Dr. phil)。2013年から現職。専門と関心分野は、西洋中世美術史を中心に宗教美術全般。現在は、宗教とイメージ・表象の関係を深めることに取り組む。宗教のなかで美術や造形物、建築物が果たした機能、それらが信仰者へ与える効果などを考察する。

■主要業績

『ヨブ夫妻の図像学』『経典としての聖書』リトン2009。『宗教美術研究』『宗教史とは何か』下巻 リトン2009。『「よきサマリヤ人」の譬え—図像解釈からみるイエスの言葉』三元社2010。『祈りの言葉とイメージの力』『感情と表象の生まれるところ』ナカニシヤ出版2013。

細田あや子

(ほそだ あやこ) 新潟大学人文学部教授

生と死の世界を往還する美術

内容紹介:

生の世界と死の世界のあいだは断絶していき来は不可能なのでしょうか。いいえ、三途の川、賽の河原、あるいは煉獄などがすぐに思い起こされるように、生と死の世界のどちらにも通じるような場所のイメージはさまざまに見いだされます。また、亡くなった人がわたしたちの夢のなかにあらわれることもよくありますが、これも生と死の世界がオーバーラップしている現象といえるでしょう。目に見えずどこにあるのかもよくわからない不思議の世界、異界への旅について、絵画などでは具体的に描写されています。異次元間の越境、往還がどのように美術作品に見出されるのか、さまざまな例をあげながら考えてゆきます。

第6回連続講座

12月7日(土)

16:20-17:50

■プロフィール

1956年東京生まれ。東京大学大学院人文科学研究科単位取得退学。宗教学・宗教史学専攻。2000年より現職。ドイツ近代の宗教思想、および宗教学・宗教哲学の基礎理論的な問題に関心をもって研究している。

■主要業績

『近代日本における知識人と宗教—姉崎正治の軌跡』(共編著)東京堂出版2002年。『啓蒙と霊性』岩波書店2006年。『スピリチュアリティの宗教史』上下(共編著、宗教史学論叢15-16)リトン2011-2012年。

深澤英隆

(ふかさわ ひでたか) 一橋大学大学院社会学研究科教授

死後生論の哲学をめぐって

内容紹介:

死後生という主題が、哲学のテーマとはなりえなくなっから、すでに久しい。19世紀末前後まではなお第一線の哲学者が論じる主題でありえた死後生は、20世紀になるともはや正統的な哲学では論じえない、あるいは論じてはならない問題として、次第に哲学の主題領域から追いやられた。こうした転換はなぜ生じたのであろうか。また19世紀まで、哲学はどのように、またなぜ死後生を論じたのであろうか。この講座では、ドイツ観念論に属するJ・G・フヒテの息子で、後期観念論の哲学者として知られるI・H・フヒテ(1797-1879)の死後生論を検討し、これらの問いを考えてみることにしたい。

<予告>2014年1月18日(土) 受付開始14:10

東洋英和女学院大学死生学研究所 連続〈公開〉講座「生と死の語り」

第7回 長尾敦子「欧州の生命倫理問題—脳死・臓器移植と安楽死を例として」

第8回 横倉 聡「精神保健福祉、100年の歴史から学ぶこと」



お問合せ先

東洋英和女学院大学死生学研究所
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp
03-3583-4035 (fax専用)